連載 第72回

福聚山史

文 池浦泰憲

明治の落語家「三遊亭小圓遊」（その2）

明治三十五年（一九〇二）八月二十九日、巡業中の広島尾道で亡くなった三遊亭小圓遊について、その報を伝える新聞記事では「圓遊門弟中にても最も人気あるものなりしに、惜しい哉」（『山陽新報』明治三十五年九月二日）と、その死を惜しんだ。今回は生前の小圓遊について、当時の新聞記事と後年書かれた『明治の寄席芸人』（六代目三遊亭圓生著）をもとにたどってみたい。

●「お能の面」

小圓遊には「お能の面」というあだ名があったという。その高座の様子は、

…さて色男の小圓遊は相も変わらず色気たっぷり。ニヤリと笑って扇子の尖で指折り数える具合、ヤヤ横座りの物々しく手を上下して酔えるが如く、軽さには満場動揺めき渡りて、長襦袢むきだしのステテコは此男になくてはならぬ。…

（『中国新聞』明治三十五年五月十六日）

といわれるような、色気のあるいい男であったという。

●地方興行で人気を博す

普段、東京の寄席に出演している落語家は、時に地方に巡業する。その世界では「ドサ」といって、地方の町を廻って興行する。ふつうは、そういった「ドサ廻り」では、芸人たちはいいかげんなものを着て廻っていたという。それを小圓遊は、「いや、それではいけない。まず前座から残らず、おそろいのもので、きらびやかに見せなくちゃいけない」と言い、一座に落語に加え音曲などの芸人を多数入れ、さらに特に宣伝いうものにも力を入れたという。従来の興行とは違ってきらびやかで陽気な小圓遊一座の興行は、

東京にて売出し中の落語家三遊亭小圓遊一座が本月一日より興行中なるが、初日は木戸締切の上景気引続き毎夜の好人気なるが、何れも車輪に勤め居るゆゑ音曲滑稽噺しは勿論手品等も頗る面白く大陽気で結構との評判。…

（『新愛知』明治三十三年九月五日）

開演以来非常に人気好く、初日には札止めを打ちし程なるが、一昨夜（二日目）は雨天にもかかわらず爪も立たぬ大入にて…

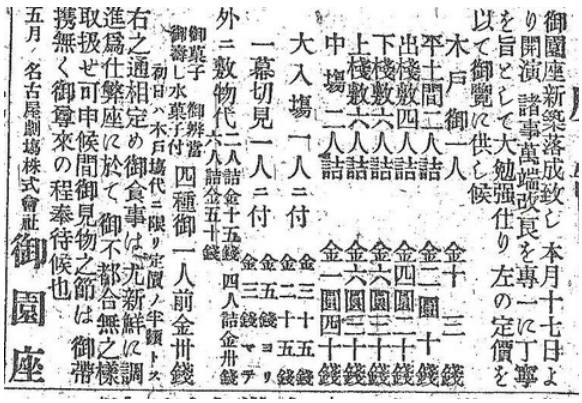
（『中国新聞』明治三十五年五月十六日）

といわれている。

また、明治33年9月26日の『北国新聞』（石川県）には、近日初めて当地で興行を行うのに先立ち、小圓遊が「何分宜しく御贔屓を乞う」旨を記した挨拶状を当社に送ってきたとある。こうした細やかな配慮も、地方での興業の盛況につながっていたのであろうか。

三遊亭小圓遊
（百花園　第210号）

『明治の寄席芸人』（1971年　青蛙房）より転載



御園座新築落成致し本月十七日より開演諸事萬端改良を専一に丁寧を旨として大勉強仕り左の定價を以て御覽に供し候

木戸　御一人　金十錢
平土間　二人詰　金二圓三錢
出桟敷　四人詰　金四圓二十錢
下桟敷　六人詰　金六圓三十錢
上桟敷　六人詰　金六圓三十錢
中場　二人詰　金一圓四十錢

大入場　一人ニ付　金三十五錢

一幕切見　一人ニ付　金二十五錢
外ニ敷物代　二人詰金十五錢　四人詰金卅錢　六人詰金五十錢　ヤテリ

右之通相定め御食事は尤新鮮に調進爲仕弊座に於て御不都合無之樣取扱せ可申候間御見物之節は御滯携無く御尋來の程奉待候也

御菓子　御辨當　御壽し　水菓子付

四種御一人前金卅錢

初日ハ木戸場代ニ限リ定價ノ半額トス

五月　名古屋劇場株式會社　御園座

明治30年5月　名古屋「御園座」の開場を伝える広告（「上方落語史料集成」より転載）。当時の東京の寄席の木戸銭は十銭くらいで（一銭はおよそ200円）、銀座木村屋のあんぱん一個が一銭で買えたという。

●芸の継承

ある時、師匠の圓遊が高座に出て噺を演っていると、前で聞いていた子どもが、「やァ、なんだ、小圓遊のまねをしてえらァ」と言ったという。師匠である圓遊が小圓遊のまねをするわけがないが、それほど小圓遊は師匠の芸を正確に受け継いでいたという現れであろう。

師匠の圓遊によって建立された小圓遊の墓碑は、自らの芸を正統に継承した弟子に対する師の思いが込められているのかもしれない。